

令和3年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立三樹小学校
-----	-----------

1 学校教育目標

志をもち こころ豊かに たくましく生きる 三樹っ子の育成 ～笑顔につながる 楽しい学校～

2 本年度の重点目標

1 信頼される安全安心な学校＜地域に開き、愛される＞ 2 共に伸びる仲間がいる学校＜認め合い、励まし合う＞ 3 わかる喜びを実感できる学校＜考え合い、話し合う＞ 4 教職員が学び伸び続ける学校＜使命感に燃え、専門性を磨く＞
--

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	○基本的な学習習慣の確立 ・姿勢改善、学習準備等の学習規律の確立 ・「家庭学習レベルアップ週間」や自主学習ノート指導による家庭学習の推進 ○基礎学力の定着 ・チャレンジタイムや読書活動、スピーチ活動、放課後学習等による基礎・基本の力の定着 ・タブレットを活用した個別最適な学習の充実 ○学び合い高め合う児童の育成 ・「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善 ・「やさしい日本語」を活用し、全ての児童にわかりやすい学習環境の推進	・朝のチャレンジタイムに「腰骨タイム」を取り入れることで、児童に正しい姿勢について意識づけをすることができた。 ・基礎学力定着のためには、学習規律の徹底が重要であることを共通理解し指導を進めた。 ・タブレットを活用したドリル学習や家庭学習レベルアップ週間、朝のチャレンジタイム、三樹っ子ががんばりタイムが定着しており、基礎基本の力が向上してきている。 ・授業研究、講師招聘の研修会を定期的に行った。授業づくりでは、「めあて」と「ふりかえり」を意識した。また、自分の考えをもたせ対話の中で学びを深める授業づくりに努めた。 ・感染症対策を講じながら、スピーチ活動とその交流に取り組むことにより、人前で話すことの抵抗感が少なくなり、構成を考えて話すことができる児童が増えてきた。 ・「やさしい日本語」を活用することで、外国籍児童や支援を必要とする児童に対して、わかりやすい学習環境づくりを進めた。 ・コロナ禍で日本語指導研修会の開催が困難となり、教職員の共通理解が不十分であった。 ・教職員アンケート「学習指導における子どもと向き合う時間の確保」が課題である。	B	・児童はタブレットに慣れ、積極的に活用をしている。今後も、コロナの影響で学級閉鎖や出席停止の状況になった際にも有効活用できるよう、技能の習得と活用の工夫を進めていく。また、家庭での児童一人一人の学びに向かう力を高めるための取組を進める。 ・日本語指導教育については、来年度は研修会の持ち方を工夫し、教職員の共通理解を深めていく。 ・児童や保護者のアンケート「わからないことがあれば、先生にたずねることができる。」の項目や、教職員アンケート「学習指導における子どもと向き合う時間の確保」の項目は、昨年と比較し若干上昇するも、まだ課題が見られる。感染防止対策やタブレットの導入等、多忙化する日々の中でも、子どもと向き合う時間を確保することは何より大切であると考え、教職員がゆとりを持ち、子どもと向き合えるよう、年間を見通した研修計画を作成し、研修の精選を行うことで、効率的効果的に研修を進められるようにする。
人権・道徳	○自分の大切さとともに、共生の心をもち他の人の大切さを認めることができる学級・学校づくり ・思いやりに満ちた人間関係の構築 ・全校生が参加できるじんけん集会の工夫 ・国際理解、多文化共生教育の推進 ・実践的指導力の向上に向けた研修の充実	・分割実施した異学年交流、学年を絞った平和集会、時間制限を設けてのグループやペア学習での交流など、社会状況を考慮しつつ、密にならずつながらを育む教育活動を工夫して実施した。 ・コロナ禍で親子じんけん参観を中止せざるを得なくなったが、じんけん月間の取組(心あつたツリー、人権作文や標語等)を音楽発表会の際に掲示するなど、新しい発信の形を取り入れた。 ・国際交流協会の多文化共生講座や、夏休み冬休みの「親子で心ほっこりタイム」など、これまでの取組を継続することで、自己肯定感や共生の心を育むよう努めた。	A	・これからも、社会状況、子どもたちを取り巻く状況の中で可能な取組を模索しながら、自分を大切にし、豊かな人間関係を構築できる取組を進める。 ・親子じんけん参観が実施できない状況になった際、親子で人権について考える機会の代替案を検討する。 ・来年度は、道徳授業ならびに道徳教育に関する職員研修の充実を図る。 ・今後も、長期休業期間等の機会を生かし「心ほっこりタイム」の時間を確保するとともに、外国籍児童が多いという本校の特色を生かし、国際理解や多文化共生のための取組を継続して行う。
特別活動	○よりよい学校生活の創造 ・学級(学年)活動や学校行事の充実 ・学校生活を向上させようとする意欲や態度の育成 ○ふるさと三樹づくり ・楽しい行事の企画 ・児童会活動の充実 ※新型コロナウイルス感染症防止への配慮	・コロナ禍においても、多くの学校行事を工夫し、対策を講じながら安全に実施するよう努めた。アンケート結果からも、行事を通して、児童が満足感や達成感を持ち、保護者も成長を感じられていることがうかがえた。 ・感染症対策をしながら、ファミリー活動や委員会活動、クラブ活動、学級での係・当番活動などを、昨年度よりも充実して行うことができた。児童会活動では、三樹キャラクター総選挙やあいさつ運動など、学校を盛り上げるための取組を実施した。 ・ふるさと学習については、様々な地域行事の縮小・中止で、今年度も参加が難しかった。そのような中で、学校でのふるさと学習につながる活動(県内での修学旅行、三木市での自然学校や環境体験学習等)は行えた。	A	・今後も学校行事全般において、感染症対策を講じながら内容のさらなる充実を図り、児童に成就感や達成感を味わわせたい。また、実施の方法等についての説明を行うことで、家庭の理解と協力を得られるようにする。 ・これからは、タブレットを活用した発信の工夫もさらに求められていくことが予想される。そこで、教師のタブレットスキルを磨き、配信の工夫等についての研修を進めていく。 ・児童会活動の自主性を生かした取組、地域の方との交流、地域の施設見学等の充実を図る。また、地域とつながった活動の計画を進めることで、ふるさとを大切に育む心育てる。
生活指導	○挨拶の徹底 ・児童会、教職員一体となった全校的な取組 ○児童の内面理解 ・児童の成長につながるあらゆる場面でのふれあいの機会の充実 ○いじめや不登校、ネットトラブルなどへの組織的な対応 ・家庭や関係機関と連携し、共通理解を図りながら、組織的かつ一体的な取組の推進 ・新型コロナウイルスなどの感染症による差別やいじめの未然防止に向けた対応と指導の徹底	・登校時など、多くの地域の方に子どもたちへの声かけをいただいている。また、児童会を中心に朝のあいさつ運動を継続して行った。取組の成果もあり、挨拶する児童が少しずつ増えてきている一方で、挨拶を返さない児童や小さい声の児童も見られる。 ・感染症による行動の制限や感染症対策等で不安やストレスが溜まって、いる児童もいる。それを少しでも緩和するため、児童との個別面談や学校行事の工夫などで、子どもたちの不安やストレスの解消に努めた。 ・いじめや不登校事案については、全職員で共通理解し、保護者と連携しながら早期対応に努めた。また、高学年を中心として、ネットトラブルを防止するために「ネット利用教室」を活用した。 ・子どもたちが感染症への正しい知識を持てるようにし、コロナ感染に対する偏見や差別をなくすための指導に努めた。	B	・児童アンケート、保護者アンケート、教職員アンケートのいずれにおいても、あいさつをすることへの課題が見られた。子どもたちがあいさつをすることへの抵抗をなくす工夫や取組を、今後、生活指導部会や児童会、地区児童会等を中心に進める。 ・児童観察やいじめアンケート等を有効に活用し、児童の内面理解に努め、開発的・予防的な指導と迅速な対応に努める。 ・道徳科や学級活動をはじめ、日々の教育活動すべての場面で自他を大切にすることを育んでいく。 ・いじめ・不登校については、日頃から保護者と連携を密にし、また、教職員間のつながりを大切にすることで、早期発見・早期対応に努める。関係機関とも連携を密にしながら組織的、継続的な取組を進める。
特別支援教育	○個々のニーズに対応した支援体制の充実 ・児童理解研修での共通理解 ・家庭や関係機関、幼小中との連携 ○共生の心の醸成 ・インクルーシブ教育システムの構築 ・すべての児童が存在意義、有用感を感じる学級学校づくり	・教育センターや医療機関などの専門機関、療育機関や幼稚園・認定こども園、また、中学校や特別支援学校とも積極的に連携を図り、より効果的な支援に向けた相談や保護者面談を進めた。 ・平素の授業や学校行事、啓発授業において、認め合える仲間づくりを進めるとともに、個々の児童の特性に合った活動や役割についての配慮を行った。 ・配慮や支援を要する児童について教職員で共通理解を図るために、校内支援委員会を定期的に、また、必要に応じて開催した。	B	・発達障害等に関する基礎的な知識や対応スキルを全教職員が習得するための校内研修や、個々の専門性を高めるための研修の機会を増やしていく。 ・早期に個別的教育支援計画・個別の指導計画を作成し、個々のニーズに応じた支援ができるようにする。 ・配慮や支援を要する児童に対し、全教職員の共通理解にもとづくきめ細やかな支援を行うために、校内支援委員会のより良い開催の仕方を考える。 ・認め合える仲間づくり、共同学習のあり方の創意工夫に努める。
健康・安全 防災教育	○健康づくり ・給食時の感染症対策の徹底 ・必要に応じた手洗いマスク換気の励行 ・「保健だより」「給食だより」による啓発 ○安全指導 ・登校時の並び方や下校のマナー、安全な遊び等、自分の命や安全を守る指導と啓発 ○防災・防犯指導の充実 ・感染症対策をした上での避難訓練(火災、地震、水害)および防犯訓練の充実	・長引くコロナ禍において、換気の仕方や消毒の仕方を教職員や児童に周知徹底したり、三樹っ子めあてやコロナ対策のDVDを作成したり、放送で換気の啓発ソングを流したりして、感染症対策に取り組んだ。 ・児童・保護者アンケートから、「早寝・早起き・朝ごはん」に課題が見られることがわかった。 ・校区に不審者情報が出た場合には速やかに現地へ赴き、また、近隣地区にも連絡を回し情報を共有するなど迅速に対応した。 ・信号のない横断歩道での警察官の見守りや白線の引き直しなど、通学路の安全に向けた取組が進んだ。 ・警察機関とも連携し、教職員による不審者対応訓練を実施した。 ・コロナの状況により、4月の引き渡し訓練は実施を見送った。	B	・コロナに関しては、まだまだ予断を許さない状況であるため、今後も引き続き感染症対策に努めていく。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」の習慣を身につけられるよう、啓発を進める。 ・登校班や通学路に関しては、道路事情や地域の実情が変わる中、従来のままでは不都合な点が生じてきた。登校班の合併や通学路の変更など、実情に合わせた見直しを進めていきたい。 ・交通ルールの遵守等については、教育活動の多くの場面で、「自分の身を守る」大切さを伝えていく。 ・交通渋滞の持ち帰りや未だ徹底までは至っていない。今後も声掛けをしていきたい。
家庭・地域との 連携	○地域と共に歩む学校 ・「ふるさと三樹」を愛する心情的育成 ・学校の様子や取組の積極的な公開 ○幼稚園・子ども園・中学校との連携 ○家庭との連携 ・外国に縁を持つ児童・家庭に対する支援など、個々のニーズに寄り添った教育支援	・感染症対策を行い、活動方法を工夫して、地区別分散授業参観やスポーツフェスティバル、音楽発表会などを実施するとともに、校外学習や環境体験、花植えなど、地域の方ともふれあう機会を設けた。 ・各種通信やホームページ等を活用し、定期的に学校行事やふだんの学校生活の様子を発信するよう努めた。 ・PTAの方の働きかけにより、「飛び出し坊や」看板の新設を行うことができた。 ・コロナ禍により、幼稚園・こども園・中学校等との連携は困難であった。 ・日本語指導推進教員を中心に関係機関と連携したサポート体制のもと、外国籍児童への取り出しによる個別指導や日本語指導を行った。	B	・コロナ禍においても保護者の方の参加が可能な取組を考案し実施していく。 ・リモートを活用した方法を工夫研究し、学校の様子を積極的に公開していく。 ・地域の良さやふるさとの良さを実感できる取組を今後も進める。 ・幼稚園・子ども園・中学校との連携・交流を深めるために、連携先と相談しながら、新たな取組を考えていく。 ・外国籍児童については、「やさしい日本語」活用をはじめとし、関係機関と連携し、生活面や学習面において不安を取り除けるようさらなる支援体制を整えていく。 ・すべての児童の個々のニーズに寄り添った教育支援の充実を図れるよう、家庭や地域との連携に努める。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

学校職員、児童、保護者の3者を対象にアンケートを実施しており、その結果を数値化し、経年変化を見ながら評価基準に照らして総合評価している。コロナ禍2年目となり、これまでの教育活動に様々な制限がかかる中、ニューノーマルな生活様式学校様式を柔軟に取り入れ、できることを模索し、創意、工夫のもと、積極的に教育活動に取り組まれた成果の表れである。評価項目の1項目以外、すべての項目が昨年度より上昇したことは評価できる。そして、教職員の努力により、コロナ前よりアンケート結果が良好な点が多くなっていることは高評価である。児童や保護者、地域へ働きかけ、その結果を加味しながら自己評価している。したがって、自己評価方法は適切である。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
・評価Bは適切である。 ・感染症等で、学校を休まざるを得ない状況にある児童に対して、タブレットを積極的に活用した遠隔授業の実施や、家庭学習レベルアップ週間・朝のチャレンジタイムなどの児童の学びを保障しようとする取組により、基礎学力が定着してきたことは評価できる。タブレットを有効活用できるように技能習得と活用工夫にさらに取り組んでいただきたい。 ・タブレット学習が定着してきたことやスピーチ等人前で活動することに抵抗がなくなってきたのが、保護者の立場としても十分にうかがえた。 ・自主学習について、課題の裾野が広さずと感じる。低学年には「漢字」や「絵」、調べものなど、ある程度課題を提示してあげるほうが取り組みやすいと考える。 ・「子どもと向き合う時間の確保」のための改善の方策は適切である。
・評価Aは適切である。 ・保護者が、より答えやすいようにアンケート内容の問い方を改善し、より正確な結果を導き出すとする取組はよい。 ・外国籍児童が多いという実態を生かし、来年度の教育活動を創造していくこととしている姿勢は評価できる。 ・コロナ禍にあっても、教育講演会や異学年交流、平和集会、ペア学習での交流、夏休み等で親子で取り組む活動など、実施方法を工夫して、繋がりを育む教育活動に取り組んだことは、評価できる。これからも、子どもたちが、自分を大切に、豊かな人間関係を構築できる取組をさらに進めていただきたい。
・評価Aは適切である。 ・コロナ禍においても、感染症対策を講じながら多くの学校行事や児童会活動、クラブ活動等、様々な工夫し、実施した成果は保護者の声となって現れている。まだまだ、コロナの収束が見込めない中、課題は多いと思うが、保護者のご理解を得ながら、行事内容の充実を図りたい。 ・さらなる改善に向けての方策も適切である。 ・校外学習で、金物資料館や防災セク等、ふるさと学習の機会を増やしてみてもうかがう。
・評価Bは適切である。 ・楽しく学校生活を送っている児童の姿がアンケート結果や保護者の声から浮かび上がってくる。朝の校門での教職員による季節感あふれるパフォーマンスに、子どもたちは笑顔で登校できていた。朝の多忙な時間帯にもかかわらず、児童に寄添った企画を考え、実践する教職員の姿勢に対し、保護者・地域は大いに感謝している。課題であった挨拶も、挨拶運動を継続することによって、徐々に改善してきている。コロナ禍において大きな声を出すことを是しにくい状況も理解できるが、子どもたちがあいさつの重要性を理解し、抵抗なく自発的に挨拶ができる工夫や取組等について、学校と家庭をはじめ地域と知恵を絞りながら、さらなるあいさつ運動を展開されたい。
・評価Bは適切である。 ・個の教育的ニーズに応じた「適切な指導」と「必要な支援」についてさらに研修を深め、全教職員でレベルアップを図ろうとする改善策が立てられている。全教職員すべての児童を育てるという意識をさらに高め、質の高い「交流及び共同学習」に取り組んでいただきたい。 ・配慮や支援を要する児童について教職員で共通理解を図るため、校内支援委員会において研修をされ、また、他機関との連携を図れていることは評価できる。よりきめ細かな支援ができるよう保護者との連携強化と相互理解を十分に図りながら、取り組んでいただきたい。
・評価Bは適切である。 ・昨年度に引き続き、達成状況は良好である。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」の習慣化は家庭との連携なしでは実現できないと思われるので、保護者と協働で取り組んでほしい。 ・安全教育面では、通学路対策や自転車マナー等を気にする声もまだまだ多い。また、子どもたちの登下校時の危険行為や交通ルールが守られていないなどの保護者からの意見もあることから、児童には、自分の身を守る意味でも、十分に家庭と連携し、指導を図りたい。 ・感染症対策や警報発表時のメールによる保護者への迅速な連絡等、適切な判断は高く評価したい。
・評価Bは適切である。 ・コロナ禍にあっても、活動方法を工夫して、地区別分散授業参観やスポーツフェスティバル、音楽会などの実施や花植えなど、地域の方とのふれあいの機会を設けることができた。また、ホームページ等を活用した学校行事や普段の学校生活の様子を発信する取組は、保護者からの評価も高く良かった。 ・保護者にとって参観日の中止は残念なことなので、日程の柔軟な対応を期待したい。 ・コロナ禍において、リモートの活用はかなりノーマルなツールになってきている。保護者・地域住民の授業参観や授業参加、幼稚園・子ども園・中学校との連携・交流にも活用できると思われるので積極的にチャレンジしてほしい。 ・外国籍児童の教育保障・進路保障は喫緊の課題だが、学校だけで抱え込むのではなく、関係機関や家庭、地域資源との連携を強めることで教育効果を発揮する。連携の仕方を模索していったほしい。